

独自の視点で 薬剤の新たな 可能性を切り開く。

薬学部とは異なる視点から薬物動態研究を行っている進教授。
より効果的で副作用が少ない薬物療法の開発を目指している。

生物生命学部
応用生命科学科
進研究室
進 正志 教授



細胞レベルで データを積み上げる

血中濃度推移の測定を通して「薬が体内でどのような振る舞いをするか?」を解析する薬物動態学。薬物治療の研究において必要不可欠な手法だが、進教授は「効果や副作用のメカニズム解明と、より適切な薬物療法開発のためにはこれだけでは不十分」と考えている。そこで細胞レベルで時間的な変化を観察する免疫組織化学を併用。独自の研究視点が注目されている。



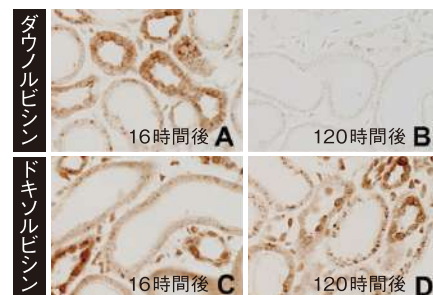
実験は手作業も多く丁寧さと粘り強さが求められる

▶進研究室メンバー

左から順に
重富さん(福岡県/糸島高校出身)
嶋田さん(長崎県/長崎日本大学高校出身)
川上さん(熊本県/文徳高校出身)
羽田さん(長崎県/佐世保南高校出身)
孫さん(鹿児島県/れいめい高校出身)
篠原さん(熊本県/尚綱高校出身)
野中さん(鹿児島県/川内高校出身)
一原さん(宮崎県/日向学院高校出身)
以上全て4年生
大学院 工学研究科
博士後期課程応用生命科学専攻 2年生
山本さん(長崎県/口加高校出身)
齋田 哲也 教授(進研究室)

根気強い作業の積み重ねが 揺るぎない研究成果をうむ

実は薬学において免疫組織化学を取り入れている人はほとんどおらず、研究に必要な薬物への抗体も入手が難しい。そのため、自分たちで抗体を作るところから始め、動物組織を使った実験まで、粘り強く研究を進める必要がある。そして確信を得るために、条件を変えて何度も実験を繰り返す。それらの努力が実を結び、近い将来新薬開発などに繋がることを期待したい。



化学構造のよく似た抗がん剤ダウノルビシン(A・B)とドキソルビシン(C・D)2種を投与したラットの腎臓で16時間後と120時間後の薬剤の蓄積程度を比較

